

私たちは、セネクと呪技遣じゆぎつかいらの亡骸を残し、すぐに〈蒼蛇亭〉を出た。宿代として金貨五枚を寝台の上に置いて、夜明け前に出発した。

こんな刻限に蟲車を拾えるはずもなく、街道には徒歩で出ることにした。陽が昇り、昼近くになるまで延々と歩く羽目になった。衛士隊は追つてこなかった。金貨五枚が効いたのかも知れない。

その間、私とワドワクスはほとんど無言だった。

陽が昇り、気温も上がり始めた。先に口を開いたのは、ワドワクスだった。

「ゴルカンさん……怒っていませんか？」

「なぜ怒らなきゃいけない？」

「ゴルカンさんもセネクさんも、あの連中と命懸けで闘った。なのに、僕はただ見ていることしかできなかった。怖かったんです。死ぬほど怖かった。逃げ出したかったんです。笑って下さい。あんまり怖すぎて、逃げることもすらできなかったんですから」

「私も、怖かったよ」

「冗談を。あなたは勇敢でした。セネクさんも。僕はとんだ腰抜けだ。ほんとうに僕みたいな弱虫が、ジエク君を救えるんでしょうか？ 今、僕はどうしてこんな街道を歩いているんだろう。ふと疑問に思ってしまう。こんな腰抜けの自分が、蛇神と闘えるのか？ ジエクを、そして……ドウィータを救えるのか……？」

「前にも言ったはずだ。人にはできることとできないことがある。あなたは、子どもに知恵を授け、導くことができる。私は、村はずれで木を削っている」

「やめて下さい。よけいに惨めになるだけです。僕は……やつぱりドウィータには不釣り合いな男なのかも知れない」

そこで一度ワドワクスは言葉を切った。そして、自嘲気味に笑った。

「夕べの僕の姿……ドウィータが見たら軽蔑するでしょうね。そう思いませんか？」

「さあ、今のドウィータを、私はよく知らないからね」

「じゃあ、あなたの知っている四年前の彼女ならどうです？」

ワドワクスの目つきは真剣だった。少しの間考えて、私は答えた。

「おそらく、しないだろう。彼女が軽蔑するのは、そして腹を立てるのは、人を傷つける者だ。理由はどうであれ、人の心や体を傷つける者を、彼女は心底、憎悪していた」

ワドワクスは口をつぐんだ。考え込んでいる様子だった。私は続けた。

「正直に告白するよ。私は今この瞬間もまだ、怖いんだ。吐きそうなくらい、怖い」
「怖い？」

「人の命を奪ったのは四年ぶりだ——どんな相手であれ、四つもの命を。見てくれ」
私は両の手をワドワクスの前に差し出した。指先が小刻みに震えている。

「止まらない。ずっと震えつばなした。胸もむかつかっている。胃の腑が裏返りそう
だ。人の命を奪うのが、こんなにおぞましいことだと、今まですっかり忘れていた」

「ゴルカンさん……」

「衛士を辞めてサンナ村へ引っ込んでからも、剣はいつも体に帯びていた。毎日、
剣の手入れもしていた。剣術の訓練も怠らなかつた。何度か、酒場で不逞の輩と斬
り合いになったこともある。相手が二度と剣を握れないようなかたわにしてやった
こともしばしばだ。しかし、命までは奪わなかつた。これまでは、殺さずに済んだ」

「でも夕べは、ゴルカンさんがやらなかつたら、みんなが殺されていました」

「やつらを殺さずに、撃退することもできたかも知れない。しかし、そうはできな
かつた。私は四人を斬り殺した。反吐が出そうな気分だ」

「自分の身を守るなら、あるいは人を守るためなら、剣を振るうのは当然でしょう。
それができるあなたを、私は尊敬します」

「大きな間違いだ」

「何ですって」

ワドワクスは気を悪くした様子だった。

「人を殺せる人間を、尊敬すべきじゃない。衛士隊にいた頃は、私も人を斬ること
が平気だった。むしろ悪党どもを斬り殺すことが衛士の義務だとさえ思ったことが
ある。衛士のなかには、斬つた相手の人数を競っている連中もいた——ベリーグも
その一人だったがね。私が衛士になったばかりのとき、テジンで辻斬りが横行した

ことがある。毎晩のように、何の罪咎つみとがもない市民が何人も斬り殺された。私は、下手人の殺し方から、相手の出方を讀んだ——そして、見事に的中したよ」

「やつぱり、あなたは腕利きの衛士だったのではないですか？」

「下手人は衛士だった。その男は、人を斬ることに邪よこしまな快楽を覚えるようになっていた。私は、その男をその場で斬り捨てた。そして、事件そのものを葬った……そんな私も、その男と同罪かも知れない」

ワドワクスは言葉を選びながら、言った。

「あなたは、もしかしたら衛士を辞めることによつて、人の命の重さを知ることができた、ということなのでしょうか？」

私は苦笑した。

「命が重いのかどうか、私にはわからない。それこそ神のみぞ知る、というやつだ。

この世界を創造した神々が、大人族コデュークと小人族オゼットの命をどの程度に見積もっていたのか。そこを這つてるフウセンアリア、空を飛ぶヒイロハシツバメとどれだけ違うのか。

人は、神々が人そつくりの姿をしていると勝手に解釈しているが、実はツノナメクジのような姿かも知れない。人は、地面で蠢く塵芥のようなものかも知れない」

「しかし人には知恵があります。僕は博物学者ですよ。この世界の生き物については、あなたよりも詳しい。人なみの知恵を持った生き物は、ほかには存在しません。

人だけが、高い城も建てられるし、田畑も耕せるし……人も愛せる」

「そしてつまらぬ領地争いで、いがみあい、殺し合う。あるいはもつとくだらない理由で同族の命を奪う。そんなことをする生き物が他にいるのか？」

ワドワクスは無言だった。

エクウムから街道を八ラグル（約二十四キロメートル）ほど歩いたところで、ようやく一台の蟲車を拾うことができた。手綱につながれたミドリカケトカゲは、ずいぶんと年老いていた。が、それ以上に御者の男が老いさらばえているように見えた。

水晶山へ行く道は二つ。このまままっすぐに五百洲川いおす沿いの街道を南へ進み、水晶湖の畔の村まで行き、そこで舟を雇つて水晶湖を渡る方法。もう一つは、遠回り

になるが、途中で進路を東へ向け、水晶湖を迂回する方法。

私たちは前者を取ることにした。水晶湖を渡るには死の危険があるというさまざまな噂を知らないわけではない。が、時間を無駄にできない。

夕刻まで蟲車に揺られ、水晶湖の北側の畔にあるレーストの村に着いた。水晶湖の畔に位置するレーストは、かつては街道の交わる交易の要所として栄えた街である。また、水晶湖で獲れる魚介類は、高級食材としてテジンの都まで運ばれたものだった。

蟲車が街への門をくぐったときには薄暗くなっていた。

人の姿はまったく見えない。これが、かつて繁栄を誇った街なのか。門の前は広場になっていた。中央に、かつては噴水であったろう石の構造物があった。水は涸れている。噴水はおそらく、雨の女神ニールをかたどったものに違いない。が、今では雨神の両の腕はもげ、頭も半分欠けていた。

私たちを降ろし、銀貨を受け取った老御者は、逃げるように蟲車を走らせて去った。

「いやな気配です。いったい人々はどこに消えてしまったんでしょう？」

ワドワクスが言った。

「消えちゃいない」

中央通りに面する建物のあちこちの窓から、強い視線を感じていた。町人たちは我々の到着に気づいている。しかし、姿を現そうとしないのだ。

私は周囲を見回した。窓、窓、窓……。暗い穴のようなそれらの向こうに、警戒と恐怖と好奇に満ちた眼が隠れている。

私は、酒場兼旅籠とおぼしき店に近づいた。風雨にさらされて薄汚れた看板には南方文字と東方文字の両方で〈シロワシ亭〉と彫られているのが、かろうじて判読できた。

〈シロワシ亭〉の扉を押した。鍵はかかっておらず、難なく開いた。その瞬間、むつとするような澱んだ空気に包まれた。ワドワクスは、露骨に鼻を手で押さえた。酒場に客はいなかった。店の者の姿も見えない。

「じめん」

私の声に反応して出てくる者はいなかった。しかし、厨房の奥には間違いない人がいる。

「酒をくれ。開いているんだろう？」

沈黙がしばし続いた。

「旅の者だ。ここは酒場だろう。酒くらい出してくれ」

ワドワクスが私の腕を引きかけたとき、厨房の奥の扉が開いた。現れたのは小人族オゼットの、しかも子どもだった。そしてその手には、短剣を握っている。小人族の少年は、軽々と厨房と酒場を仕切る飯台の上に跳び乗った。背丈は私の腰くらいまでしかない。が、飯台に上れば、視線は私たちを見下ろす高さに来る。

「おまえらの仲間、二人も斬ったんだからな！ おまえらも真つ二つにされる前に、さっさと水晶山へでもどこへでも消えちまいな！」

威勢のいい言葉が少年の口から発せられた。年の頃はまだ十二、三歳くらいだろう。

「待つてくれ。何の話をしてるのか、私にはわからない。我々は、ただの旅人だ」

「うるさい！ 父ちゃんと母ちゃんをあんふうにしやがって！ 姉ちゃんを…

…姉ちゃんを返しやがれ、人でなし！」

その言葉の最後は嗚咽で震えていた。

「蛇神ヘクロノミ崇拝者が、現れたのか？」

少年ははつとして顔を上げた。

「蛇神を崇拝している連中だ。武装している者もいる。連中は水晶山へ向かってい——ということとは、北方や西方の蛇神ヘクロノミ崇拝者たちは、必ずこの町に来ざるを得ない——水晶湖を渡るために。やつらは何をしたんだね？ この町の人たちにどんなことをしたんだ？」

「剣を下ろしなさい、トレアンダ坊ちゃん」

厨房の奥からしわがれ声が聞こえた。姿を現したのは、同じく小人族オゼットの老人だった。腰がほとんど「くの字」にまで曲がっていたが、その眼光は鋭く私を見据えていた。

次の瞬間、トレアンダと呼ばれた少年の手から、短剣がちやりと音を立てて落

ちた。少年は飯台の上にしやがみ込み、激しく泣きじゃくり始めた。

ワドワクスが、思わず手を差し延べ、少年の肩に触れた。少年は邪険にその手を振り払った。もう一度ワドワクスは少年の肩に触れた。今度は、少年は抗わなかった。少年はワドワクスの胸に顔を埋め、激しく嗚咽した。

「可哀想に……よほど恐ろしい目に遭ったんだね」

ワドワクスは学舎まなびやの教師らしく、慣れた様子で少年の背中をさすっていた。その優しい仕草は、血で穢けがれた私には決して真似することはできなかった。

老人は、いつの間にか大ぶりの二つの杯をコルメ酒で満たし、私たちの方へ押しやった。

「あんたらは連中とは違うようだ。かりにお仲間だったとしても、もう遅いがね」
「どういう意味ですか？」

私はコルメ酒の杯を一気に空けた。

「やつらは行っちゃったつてことよ。もう水晶山へ行っちゃった。この町にや何も残っちゃいねえ。尻の毛まで抜いて行きやがった。残ってるのは、ほれ、こんな子どもと年寄りだけ。連中の言葉を最後まで信じなかった者たちだけじゃ」

「蛇神ヘクロノミ崇拝者たちが若い人たちを連れ去ったということですか？」

ワドワクスが尋ねると、老人は冷ややかな眼を彼に向けた。

「兄さん、ここは酒場だ。人にものを訊く前に、杯を空けるのが礼儀つてもんだ」
ワドワクスはぎよつとした顔つきになった。

「僕は、お酒が……」

言いかけたが、老人の表情を見ると、意を決したように眼をつぶって一気に杯をあおった。次の瞬間、ワドワクスは泣きそうな表情になり、激しく咳き込んだ。

老人はそこで初めて笑みを見せた。

「すまぬことをしたな、旅人さんよ。あんたたちは、北の国から来たのじゃな？」

老人の問いに、必死に咳をこらえながら、ワドワクスが答えた。

「そ、そ、そうです。私はワドワクスと申します。北の国のブレジクという町で、学舎まなびやの教師をやっております。ここまで……人を探しに来ました」

「わしの名はヒジ。で、こちらも学舎の先生なのかね？ そうは見えぬが」

ヒジューは、私の腰に帯びた剣を見下ろしながら言った。

「私は西の国の者です。ゴルカンといいます。ワドワクスとともに、人を探しに水晶山へ行く途中なのです」

「北の国のお方と西の国が一緒に？ わざわざこんなところまで来るとは……」

私はただ黙って、空の杯をヒジューに押し出した。ヒジューも何も返さず、杯をコルメ酒で満たした。私はそれを一気にあおった。

私は言った。

「蛇神崇拝者たちがこの町を訪れたのはいつですか？」

「そう……はじめて連中が姿を見せたのはいつじゃったかな……坊ちゃん、覚えておいで？ わしはもう耄碌が激しくて、すぐに忘れてしまうんじゃない。どんな大切なことも」

「もう三月も前だよ、ヒジュー」

それまで黙っていたトレアンダが言った。

「僕、覚えてる。お姉ちゃんの誕生日だったんだ。みんなでミドリイチゴの焼き菓子を食べて、甘いガボノ茶を飲んだんだ。その夜だったよ。見たことない黒い長衣を着たおかしな人がレーストの門をくぐったのは。僕、お姉ちゃんと一緒に二階の窓から見たんだ。それで僕、言ったんだ。『あの人たちがどこから来たのかあてっこしよう』って」

あとを引き継いだのは老人だった。

「その日を境に、次々に旅人たちが訪れるようになった。この町の旅籠は大繁盛で、誰もが喜んだもんだ。そのうちに、おかしなことを言い出す者が始まった。そのときには、わしはまだこの町全体が呪われることになろうとは、思いもせなんだ」

「呪い？」

ワドワクスが二杯目のコルメ酒の杯を空け、身を乗り出した。

「わしが最初に聞いたのは、隣の宿屋の女将だ。なんでも、今泊まっている集団の客は水晶山に不老不死の薬をもらいに行く連中だ、とな」

「不老不死の薬——大蛇の唾液——〈蛟漿〉のことですか」

「そのときはまだ蛇のことなど誰も口にしておらなんだ。わしも気づかなんだ。し

かし、人の口に戸は立てられぬ。十日もせぬうちに、旅人たちは蛇神の僕しもべたる大蛇を甦らせるためにあちらこちらから集まってきた蛇神崇拜者ヘックロノミだということがわかつてきた」

嗚咽を噛みしめた声でトレアンダ少年が続けた。

「その頃からこの町全体がおかしくなり始めたんだ。クトルもレナシユ——ちっちゃい頃からの僕の友達だけど——も、家族で水晶山へ行くなんて言い出すんだ。みんなで不老不死の妙薬を恵んでもらうために。二十日くらい前、突然父ちゃんまで言い出したんだ。みんなで水晶山へ行くって。でも、うちの旅籠に泊まったあの先生が止めたんだ。でも……みんな言うこと聞かずに行っちゃった」

「あの先生というのは？」

ワドワクスが身を乗り出した。

「女の人……あ、思い出したよ。先生も人を探してるって言ってた。僕みたいな子を」

私とワドワクスは思わず顔を見合わせた。先に口を開いたのはワドワクスだった。「その女の先生は、何て言う名前だった？ 探している子どもの名前は？ 旅籠を出てどこへ行ったの？」

「そんなにいっぺんに訊かないでよ……。ええつと……女の先生の名前は、宿帳に書いてあるかも知れない」

少年は、厨房へ引つ込み、すぐに、一冊の年季の入った冊子を持ってワドワクスに差し出した。ワドワクスは、引つたくるようにしてそれを受け取った。

私は、少年に向かって尋ねた。

「きみはどうして家族と一緒に水晶山へ行かなかつたんだね？ 不老不死の妙薬がもらえるかも知れないんだよ」

トレアンダは唇を噛みしめた。

「それはわしのせいじゃ」

口を挟んだのはヒジューだった。いつの間にか、飯台にはマカル酒の瓶が立っていた。ヒジューは瓶に口を付けて、直接飲んだ。彼はその瓶を私に渡した。私も無言のまま、コルメ酒よりずっと強いマカル酒を瓶から喉に流し込んだ。喉と胃の腑が焼

けるようだった。

「わしは、蛇神の……いや、蛇神に魅入られた愚かな者どもの恐ろしきを知っておった。若い頃には、そういう輩と一戦を交えたこともあった。昔の話じゃがな」

ヒジューは私からマカル酒の瓶をひったくると、瓶に口を付けてぐいぐいと強い酒をあおり、再び私に瓶を突き出した。私も同様に瓶からあおった。無言で先を促した。

「人は何かに魅入られると、『人である』ことをやめる。邪よこしまなるものに操られる傀儡くわいづつと化す。『邪なるもの』とは蛇神のことではない。我々人が内に秘めている闇の部分じゃ。だから、始末が悪い。邪なるものが外に形あるものとしておれば、それを退治すればよい。が、己の内には存在しないのだ。いかに闘う？ いかに救う？ なあ、あんた方、『人が人である』とはどういうことかわかるかね」

「あなたはいつたい……」

私は言いかけたが、ヒジューは無視して続けた。

「人が人の思いを感じ取ること。人が人を理解すること——少なくとも理解しようとする。これは他のどんな動物にも真似のできぬ技じゃ。しかし、ひとたび強大な『何か』に己を託してしまえば、人は人を思いやることができなくなる。その眼まなこは己の内しか見ることができなくなる。その耳は己の声しか聞くことができなくなる」

言葉を切り、ヒジューはマカル酒の瓶をあおった。もう酒は数滴しか残っていないかった。

沈黙が下りた。聞こえるのは、ワドワクスが急いで宿帳の紙をめくる音だけだった。

「旅の方たちよ、悪いことは言わぬ。水晶山へ行くのはやめるのだ。いずれにせよ、この町からの渡し舟はもう一隻も出ておらん。さつきとあんたがたの国に帰るのだ。そして、静かにを過すごすのだ——嵐が去るまで」

「駄目です……載っていませんでした。ドゥイータの名は」

ワドワクスが悲壮な声で言った。

「あの娘さんなら、わしも覚えとる」

ヒジューが言った。

「なんですつて？」

ワドワクスが勢い込んだ。

「聡明な娘さんだとお見受けしたよ。そして、うつくしく、また強いお人であったな。止めるのも聴かず、水晶山へ向かう最後の渡し舟に乗って行ったよ。十六日、いや、もう日が変わった、十七日前のことじゃ。名は名乗らなかつたが……あんたと同じく、まなひや学舎の先生だったようじゃ。が、奇妙なことに、腰には剣を帯びておつた。あんたのように」

「すると、ティマーが殺される十日も前のことですね。つまり、彼女はティマーの事件を知らずに、ここまで来た。すると、ティマーの事件とジェク君の失踪は無関係なんですね」

ワドワクスは私に向かって言った。

「わしは言ったのだ、同じことを。『嵐の去るのを待たれよ』と」

ヒジューは一度言葉を切り、真つ暗な窓の外に眼をやった。

「あの娘さんは、ドウイータと言いなさるのか。あの娘さんも、おそらくは蛇神の恐ろしさを身をもって知っておつたのじゃろう……」

そこでヒジューは言葉を切った。私の顔をじつと見つめた。

「そなたと同じく、な」

ヒジューは飯台の下に手を伸ばし、二本目のマカル酒の瓶を持ち出した。

私は唾を飲み込んだ。じつと老人を見つめ、言った。

「アムブレクのヒジュー殿……」

私の言葉に、老人はびっくりとも反応しなかった。ただ、マカル酒の瓶の口を小刀で開けようと悪戦苦闘しているだけだった。

「アムブレクの賢人。白鷺遣いのヒジュー。なぜあなたのようなお方がこんなところに……」

ワドワクスが愕然とした表情になった。

「なんてことだ！ 『白鷺遣いのヒジュー』？ あのじゅぎつか大賢人の呪技遣い、ヒジューなんですか？ 白い鷲、ヴァムレイにまたがって世界を駆け巡り、蜘蛛神ダイランガに

造反した悪鬼たちを北の国で退治して、東の国のザイ王に呪いをかけた黒呪技遣いを倒し……いや、そんな馬鹿な……五百年も前の伝説です」

「伝説とな、はっ！」

ヒジーは、マカル酒の瓶をようやくこじあけた。

「ヒジー？ この人、何言ってるの？」

トレアンダがきよんとした顔で、老人を見上げて言った。ヒジーはにやりと笑った。

やや酔いの回った表情のワドワクスが勢い込んで言った。

「ヒジーさん……あなたがほんとうに、かの白鷺遣いのヒジーであるなら、あなたのお力を貸して下さい。今こそあなたの力をもう一度この世のために発揮するときです」

ヒジーは何も言わず、ワドワクスに向かってマカル酒の瓶を無造作に突き出した。ワドワクスは困った表情になった。が、勇気を振り絞るようにして瓶を受け取り、口を付けてあおった。次の瞬間、はげしく咳き込んだ。

ヒジーが渴いた笑い声を上げた。

「ワドワクス、それは無理な相談だ。ヒジー殿はもう呪技を捨てたのだ」

私はそう言つて、瓶をヒジーに向かって差し出した。ヒジーは無言のまま受け取つたが、飲むうとはしなかった。

「五百年だ。五百年のあいだ、『白鷺遣いのヒジー』殿は沈黙を続けてきた。おそらく大賢人様にとっては、五百年などまばたきほどの時間とさして変わらぬ長さだつたらうが」

「旅人よ、それが何だと言うのだね？」

私は眼の前の老人をじつとにらんだ。

「四年前……四年前のテジンだ。マトスが蛇神崇拜者ヘククロノミを率いて大蛇を召還しようとした事件をご存じないとおっしゃるまい。そのとき、私もどれだけ『今、ヒジーが助けの手を貸してくれば』と思つたことか。実際、小さな噂を頼りに、部下の何人かを北の国のアムブレクや東のフィオンをはじめ、各地に派遣して大賢人ヒジーを探したほどだ」

「ほう、それはご苦勞なことじゃったなあ……」

当のヒジーは他人事のように言った。

「無論、見つけられなかった。あんた自らが現れてマトス一派と闘ってくれることを、私や私の仲間の衛士たちも期待していた。しかし、あんたは現れなかった。この地上の危機に、白鷺遣いのヒジーが救いの手をさしのべることはなかった。そして、マトスは幼い子らの命を奪い……その一派とともに消えた」

「わたしは何が言いたいのかさっぱりわからぬがね、若き旅人よ」

ヒジーは瓶からマカル酒をラッパ飲みした。

私はそんなヒジーを見据え、続けた。

「五百年だ。白鷺遣いのヒジーが最後に呪技じまぎを使ってから——クトラシアでの騒乱を鎮めてから——五百年も経っている。そのあいだにも、この地上は何度も危機に見舞われたことだろう。争いは絶えず、邪悪な者どもが、絶えず跋扈して人びとの命を奪った。しかし、何が起ころうと、あんたは現れなかった。この世界を救おうとはしなかった」

私はそこで一度言葉を切った。

酔っている、と思った。そう思いながらも、ヒジーからマカル酒の瓶を奪い、あおっていた。

「あんたは呪技を捨てた、というわけだ。そして、この世界をも、捨てた」

「だから、どうだというのだね？ 仮にわしがあんたの言うヒジーだとして、なぜそんな老いぼれ呪技遣いが『世界を救う』などと大それたことをしなきゃならんのかね？ 呪技遣いなら、この地上に何百人とおるではないか」

「あんたほどの力を持った呪技遣いはいない」

「ほう、そりゃありがたいお言葉だな。しかし、旅人さんよ」

ヒジーは言葉を切り、私の眼の奥をじつと覗き込んだ。ヒジーの双眸は、深い海の底のように暗かった。私は、呪技をかけられたのか、身動きできなくなっていた。

「この地上界を救う？ わしには、上っ面だけ綺麗事を塗りつけた安っぽい正義感にしか聞こえぬがな。たいそうなご託を並べてくれたものだ。おまえさんの真実の心がどちらを向いているのか、わたしにはわからぬ。見えぬのだよ」

で僕を水晶山へ連れてつてくれないの？ 何で蛇神と闘つてくれないの？」

「坊ちゃん、この年寄りを困らせんで下さい」

ヒジューは、私たちに厳しい顔を向けた。

「坊ちゃんの前で、おかしなことを吹聴せんでもらいたいもんだね、旅人さんがた」

ヒジューは、そう言うのと眼で入り口の扉のほうを指した。

「さあさ、階上^{うえ}でお休みになつて下さい。ヒジューもすぐに参ります」

「でも……でも……」

ヒジューの表情が一変した。険しい目つきでトレアンダ少年をじつと凝視した。そして、ゆっくりと右の手のひらをトレアンダ少年の額の前にかざした。

「坊ちゃん、もう眠るのです。そして、良い夢を見るのです。深い眠りが、坊ちゃん
の哀しみを、怒りを消し去つてくれます。デッボ・トゥ・オグ・レ・ウエップ・
リース……」

「ヒジュー……?」

尋ねかけたトレアンダ少年のまぶたが、ゆっくりと降り始め、体が揺らいだ。ヒジューは優しく少年を抱き上げた。まるで高価な羽根布団でも抱えるかのように、軽々と少年を運び、脇の階段から階上へ上がって行った。

私とワドワクスが顔を見合わせていると、すぐにまたヒジューが階段を下りてきた。

「アムブレクのヒジューよ」

私は言った。

「なんだね、〈灰色の右手〉、ゴルカンよ」

ヒジューの曲がった腰は、いつのまにか、しゃんと伸びていた。その双眸も鋭く光り、顔の皺さえも消えていた。数十歳も若く見えた。

「最初から、私をご存じだったか」

「老いさらばえたとは言え、このヒジューの眼はまだ曇つてはおらぬ。テジンの都から逃げ出した腰抜け衛士隊長が、今更何ができる？ 汚名返上でも企んでおるのか？ とんだお笑いぐさではないか？」

「否定はしない。私を怒らせようというなら、無駄な試みだ。正しい言葉に腹を立てることは、もうなくなつたから」

「ふん、おまえさんも愚か者でないことを証明したいのなら、このアムブレクのヒジの言葉に従うのじゃ。帰れ。そして、嵐の去るのを待て」

私は手を挙げてヒジを遮った。

「私にまで呪技じゅぎをかけるのは勘弁してもらいたい。あなたの言い分はわかった。もうあなたの力は借りない。しかし、帰ることもしない。なんとしても、水晶湖を渡ってみせる。そして、水晶山へ行く。これは、私が自分で自分自身に対して決めた約束なんだ。それを破るのは、自分を殺すことと同じだ。私は……」

言い淀んだが、一度、唾を飲み込み、改めて口を開いた。

「私は一度、自らを殺した。あなたの言うとおり、腰抜けの衛士隊長になり下がった。しかし、同じ過ちを二度は繰り返さない。再び死人になるのは、もうたくさんだ。たとえ大賢人様に蔑まれようと、嗤われようと、私は私の決めた道を進ませてもらう」

ヒジは黙って、値踏みするかのようになり、私を見つめていた。次に、ヒジはワドワクスに顔を向けた。

「おまえさん、ワドワクスとか言ったね。このゴルカンについていくつもりかね？」

ワドワクスはヒジに正対し、はっきりとした口調で答えた。

「私がついていくわけではありません。私が、ゴルカンさんを巻き込んだんです。たとえゴルカンさんが行かなくても、私は水晶山へ行きます」

ヒジは眼を見開いた。

「ほう、ほう、ほう……ここにも愚か者が一人増えた、つてわけかね。これはこれは面白くなってきたものじゃ。おまえさん方の尋ね人は、そんなに大事なお人かね」

「ええ、たいへん大事な人です」

ワドワクスははっきりと答えた。

「そいつは面白い」

ヒジは笑い出した。

ワドワクスは、ちらつと私を見たが、私は黙っていた。答える代わりに、懐から銭入れの革袋を取り出し、金貨四枚をカウインタの上に放り出した。

「邪魔をした。もう、あなたに会うこともないだろう」

「宿はどうするつもりだね？　今この町で開いている旅籠なんぞ、一軒もありやせん」

「あなたには指図も同情も干渉も受けるつもりはない。今夜は寝ずに歩くだけで、歩いて、水晶湖を東回りに迂回する。蟲車を拾えればそれに越したことはないが、こんな田舎じゃ、流しの蟲車など見つからないだろうが」

「なんと！」

ヒジーがまたしても声を上げた。

私は彼に背を向けた。足早にへシロワシ亭の扉を押し開いた。ワドワクスがあとに続く気配がした。

夜気は冷たかった。村は、暗闇に包まれていた。そんななか、今し方出てきたばかりのヒジーの旅籠だけが、暖かく、柔らかい光を漏らしている。

「すまん、ワドワクス」

「なぜ、謝るんです、ゴルカンさん」

「大賢人（白鷺遣い）のヒジーと出会ったというのに、むざむざとその力を借りる好機を逃してしまった」

「構いませんよ。あの方は、きつとほんとうに知恵のある偉大な方なのでしょう。

真の賢人であるが故、僕たちの愚拳を諫めて下さったんですよ」

「あなたは、よくよくでき上がったお人だ」

私は笑い出した。それにつられるかのように、ワドワクスも少し微笑んだ。

「今の物言い、ヒジーさんに似ていますよ」

「なんとね」

私たちはしばし笑いあった。

不意に背後から声が聞こえた。

「ほう、わしはずいぶんと嫌われたものじゃ」

ヒジーが立っていた。

「何か忘れ物でもしたかね？」

私が尋ねると、ヒジーはにやりと笑みを見せた。

「ああ、忘れ物じゃ」

不意に、ヒジーが何か小さな物を放つて寄越した。私は慌てて腕を伸ばし、受け取った。

それは、小さな骨でできた笛だった。首にかけられるよう、黒く細い革紐が付けられている。私はじつとそれを見つめた。そして、ヒジーを見た。

ヒジーはもう私たちに背を向けて、旅籠に向かつて戻り始めているところだった。「ヒジー殿！」

私は呼びかけた。ヒジーは歩みを止めたが、我々のほうに向き直ることはなかった。

「何も言うでない。わしも一度、自らを殺した者じゃ。そなたは言ったな、『自分の決めた道を進む』と。『誰の指図も同情も干渉も受けぬ』と。わしも同じじゃ。

「白鷺遣いのヒジー」は、死んだ。それは、他ならぬこのわしが決めたこと。何人の指図を受けようと、懇願を受けようと、アムブレクのヒジーがこの地に甦ることなんびとは、もう二度とない」

「ヒジーさん……」

ワドワクスが口を開いたが、ヒジーはそれを無視して続けた。

「そなたたちは、最後の最後に、心の底からの声を聞かせてくれた。だから、このわしも言おう。わしは、この地上界など、もはやどうなっても良いと思っておる。

この五百年の間、コデイーク オゼット大人族も小人族も、争い殺し合うことをやめなんだ。平和な日々など、一年と、いや、一月と続かなんだ。そんな『人』というものなど、滅んでしまえば良い。それが、このわしが悟った境地じゃ。だからこそ、この五百年、愚かな者どもが何をしようと、黙殺してきた。よいかね、ゴルカン、そして、ワドワクス。この世界は、遅かれ早かれ、いずれ滅びる。それが百年後なのか、明日なのかは、このわしにもわからぬが。ヘク ロノミ蛇神崇拜者どもが、今、この世界にとって大きな脅威であることは間違いなからう。しかし、連中どもを倒しても、早晚、次のマトスが現れる。それを繰り返し、人は己自身を滅ぼす……」

ワドワクスが割り込んだ。

「なぜ、あなたはそんなに『人』を信じることをやめてしまったのです？」

ヒジーの肩が揺れた。笑ったようだ。

「老いた、ということなのじゃろう。しかし、だ」

そう言つて、ヒジューは私とワドワクスのほうを向き直つた。

「この期に及んで、まだ『人』を信じようと悪あがきをする者がおつても、止めることはできぬ。ゴルカン、ワドワクス、行くがいい、水晶山へ。その笛の使い道は知つておろう」

私は手の中の骨の笛を見つめた。

〈ヒジューの呼び子〉——そう呼ばれた幻の笛。およそ七百年前に、緑龍の左手の指の骨で作られたという呼び子——

顔を上げたとき、もうヒジューの姿はどこにも見あたらなかつた。

「ヒジューさん！」

ワドワクスが声を上げた。旅籠の灯りも、いつしか消えていた。レーストの村は完全な漆黒の闇に包まれていた。

「ゴルカンさん……?」

私は答えなかつた。

ゆつくりと呼び子を唇にあてた——あらん限りの力を込めて、吹いた。

何も聞こえなかつた——かすかな音色さえも。

肩すかしを食らつたような面持ちで、ワドワクスが私を見ていた。

「ゴルカンさん？ あなたは何も酒場に忘れては……」

ワドワクスが口をつぐんだ。

確かに、聞こえた。遠い音が徐々に近づいている——羽ばたきの音。

頭上遙か高くに、灰色の影がぼんやりと見えた。

ワドワクスが言葉を忘れたかのように、口をぽかんと開けたまま、空を見上げていた。

私は身じろぎもせず、待った。

灰色の影が頭上を三度旋回した。そして、一気に私たちのほうへ急降下してきた。

「落ちてきます！」

ワドワクスが逃げようとした。

「大丈夫だ」

羽ばたきの風を頬に感じた。

そして、それは地に降り立った——大賢人ヒジীর白い鷲。

嘴の先から尾の端まで、身の丈は三十エーム（約九メートル）はあろう。尖った嘴くちばし。そして黄色く、鋭い二つの瞳。白く巨大なその体は、月明かりもないのに、うつすらと淡く妖しい光を放っているように見えた。

「信じられない……これが……これが……これが、あの白鷲、ヴァムレイ……！」

ワドワクスが、あえぎあえぎ感嘆の声を上げた。

賢き白鷲、ヴァムレイは、黄色に輝く瞳で私とワドワクスを交互に見た。そして、喉の奥を鳴らすような声を上げた。

私はへヒジীর呼び子こをかざし、ヴァムレイに向かって言った。

「ヴァムレイよ、偉大なる白き翼よ。ヒジীর殿から、この呼び子を預かったゴルカンという者だ。こちらは北の国のワドワクス。私たちを、水晶山へ連れて行ってくれ」

白鷲ヴァムレイは、頭を地面近くまで下げた。

「ありがとう、ヴァムレイ」

私は、ヴァムレイの背中によじ登った。白い羽毛はふわふわと柔らかく、そして暖かかった。ワドワクスも、おっかなびつくり、背中に登った。そして、私の背後にまたがった。

「ヴァムレイよ、よろしく頼む」

白鷲ヴァムレイは、大きく翼を拡げた。ワドワクスが息を飲むのが背後に聞こえた。

闇に覆い尽くされたレーストの村のなか、淡く光を放つ賢き白き翼——ヴァムレイは、体を一度震わせると、大きく羽ばたきを始めた。地面の砂が巻き上げられる。

ヴァムレイは、私たち二人の重さなどまったく感じていないかのように、優雅に翼を上下させた。

いつ浮き上がったのか、わからなかった。気づくと、私たちを乗せたヴァムレイはすでに地面を離れていた。

その瞬間だった。

「待つてえっ！」

甲高い声が聞こえた。小さな人影が、転がるようにして、こちらに近づいてくる。

「トレアンダ！」

ワドワクスが叫んだ。

「ぼくも連れてって！」

トレアンダに遅れて、もう一つの影が旅籠の建物から出てくるのがかすかに見えた。ヒジーだった。

「ヴァムレイよ、あの子も乗せてくれ」

私は咄嗟に言っていた。

「ゴルカンさん、駄目ですよ、あんな小さな子どもを！」

ヴァムレイが、首を曲げて私たちのほうを黄色の片眼で見た。「どうする？」と尋ねているかのようだった。

次の刹那、小さなトレアンダ少年が、ヴァムレイの足にしがみついた。ヴァムレイの体が、ぐらりと揺れた。

「ぼくも水晶山へ行くんだ！ 置いてかないで！」

少年が悲痛な叫び声を上げた。

「すまない、ヴァムレイ。もう一人を乗せてくれないか」

私が言うと、ヴァムレイはゆつくりと下降し、静かに着地した。

トレアンダは、ふらつきながらも、ヴァムレイの背中によじ登った。私は、少年を私の前に座らせた。トレアンダ少年は、短剣を帯びていた。

顔を上げた。旅籠〈シロワシ亭〉の影の前に、ヒジーが立っているのがわかった。

私は怒鳴った。

「ヒジー殿！ あなたのヴァムレイをお借りする！」

ヒジーは無言のままだった。うなずいたように見えたが、気のせいかも知れない。ヴァムレイが、再び羽ばたきを始めた。

冷たい夜気を切り裂き、伝説の賢き白鷺が舞い上がった。